

---

# ボタンに嘲笑

嵩臣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボタンに嘲笑

### 【Nコード】

N3291H

### 【作者名】

高臣

### 【あらすじ】

頭の悪い俺は頭のイイ長谷田にいつも誤魔化されていた。ソレに気付いた時には、もう遅かった。

そつだ不意に、劣等感というものを覚える事がある。努力じゃどうにもならない、才能つてやつを見せ付けられた時や。俺の頭の悪さを利用され、その掌で転がされていたという事に気付けなかった時、そして、

「オマエ、何やってんだよ」

自分の無知と非力さを、ありありと見せつけられた時、だ。そう、俺は何も知らなかった。見ようともしていなかったのかも知れない、またも気付けなかったのだろう。コイツはソレを解つてて、俺に隠していた。

「聞こえてんだろ、何やってんだ」

俺の頭の悪さを、コイツは毎回利用する。何でも隠し通せると思つてる、俺の頭が悪いから。でも残念だったな、俺、勘だけはイイんだよ。頭のイイ天才なんかと違って、そういう事についての勘は冴え渡つてる。

「長谷田」

気持ち悪い笑みしやがつて、そう呟けば今度は何も言わず無表情。少しは可愛げのある態度がとれないものなのか。いや、とれたらとれたで気色が悪い。

「…ボタン、留める。目障り」

真っ暗な部室の隅、壁に背を預け座り込むソイツに溜息交じりに言う。のろのろとその手が動いて、全開だったシャツのボタンを留め始めた。ソレを見て、もう一度溜息じゃない息を吐く。アイツにとつてみればその行為も同じだったのかも知れない。

「笑えんだろ」

馬鹿にされたか呆れられたか、そう思つたんだろ。自嘲気味に笑つて、いつもは放つたらかしにされている一番上のボタンまでも留

めていた。

「…別に」

「引くよな」

「イヤ」

言いながら、俺の脚許に落ちていたネクタイを拾い上げて。少し手元で弄んでから持ち主に放り返す。しかしソレが受け取られる事はなく、ただアイツの脚に引っかかっただけ。

「気持ち悪イだろ」

「それでも、ねえよ」

笑いながら言っているつもりなのかどうなのか知らないが、オマエ、今どついう顔してるか解ってるのか？今のコイツでは、幾ら頭の悪い俺に嘘を重ねても隠せるものなど何もない。顔が、身体が、全てから。恐怖と不安が滲み出ている。

「…んだよ、おまえ」

今のオマエじゃ、俺さえも騙す事など出来ないだろう。

「おれかっこわる…」

その後、聞こえ出した声など、耳には入らず。ただ暗闇の中、目を瞑って、

傍に居た、ずっと

(無理すんなよ、堪えたって意味なんかねえんだ)

(後書き)

説明などが少なく、意味も解り難いモノだったと思います。雰囲気だけでも伝われば幸いです。最後に、ここまで読んで下りありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3291h/>

---

ボタンに嘲笑

2010年12月14日20時55分発行